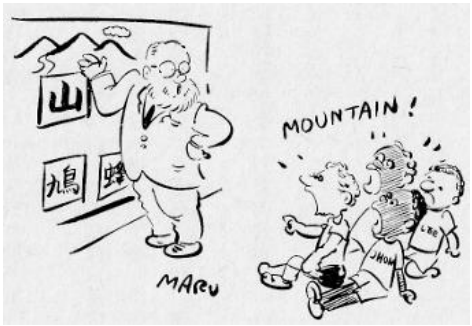
# 石井勲の漢字教室

## 4 親こそ最良の教師




## Ⅰ 親こそ最良の教師

### 第4章 最良の教師となるために

#### ー 大切な両親の導き

〝善し悪し〟は子供に反映

教育と言えば、今では皆すぐに学校を思い浮かべますが、教育とは、本来親の行なうべきものであり、親の負うべき最も大切な仕事の一つなのです。

〝教〟という字の〝攵〟は、手に教鞭を執った形を表わしていて、古い字形では〝父〟という字と同じ形をしています。つまり、教という字は、父が子を教え導く姿を表わしているのです。

〝育〟という字の〝𠫓〟は、子という字を逆さにした形で、子の生まれ出る姿を表わしています。その下の〝月〟は、〝肉〟の変形したものです。つまり、育という字は、生まれた子を養い育てることを表わしていて、それは母親の仕事を表わしています。

このように、〝教育〟という字は、父親と母親のわが子に対する仕事を端的に表わしていて、だから、教育とは、親の、子に対する本能的ないとなみである、ということが出来ます。ところが、文化が進み

学問が多岐にわたると、その教育をそれぞれの専門家たちに委任するようになりました。けれども、それは決して責任まで譲ったのではありません。

西欧には、「親は百人の教師にまさる」という諺があります。どんなに学校教育が盛んになり、内容が立派になっても、「百までも」という〝三つ子の魂〟は親の手によって出来上がっていて、学校はその土台の上に建物をのせるようなものです。同じ学校で、同じ教師に同じ教育を受けても、十人が十色になるのは親の教育が異なるための当然の結果で、「親は百人の教師にまさる」という表現は決して誇張とは言えません。

その意味で、私はこれを「親こそ最高の教師」という言葉で表現したいと思います。この〝最高〟という意味は、子供に対する影響力が文字通り〝最高〟だということです。

だから、うまくいけば「親は最良の教師」ということになりますが、まずくいくと「親は最悪の教師」ということになります。

ところが、親は〝最良の教師〟である場合よりも〝最悪の教師〟である場合の方が、昔から実際には多かったものですから、孔子やお釈迦様のような最も偉大な教師でさえ、わが子の教育はその弟子たちに任せたのです。とは言っても、そのすべてを弟子に委任したのではないことが、例えば次の論語の一文で知ることが出来ます。

孔子が庭に一人でいた時、息子の姿を見かけると、呼びとめて「詩を学んだか」と尋ねます。

「まだです」と答えると、「詩を学ばないと立派に物が言えないよ」と言って、詩を学ぶように教え諭しています。

孔子の教育では、詩を最も重視していますが、いくら重要な詩でもこれをわが子に直接講述することをしなかったことが、右の事実で知ることが出来ます。と同時に、詩を学ぶことの重要性だけは〝教〟えていることも知ることが出来ます。私は、これが親の教育の在り方の最も良い手本だと思うのです。

## 2　幼児は学習が大好き

### 飽きずに続ける反復練習

「教育とは、親のわが子に対する本能的ないとなみである」と私は言いました。つまり、親の立場から行なうものが〝教育〟であって、これを子供の立場から言いますと〝学習〟ということになると思い

ます。〝学習〟という言葉は〝勉強〟という言葉と同じ意味のように使われていますが、これほど違ったものはありません。子供は〝学習〟が大好きですが〝勉強〟は大嫌いです。この〝学習〟と〝勉強〟の違いをよく明らかにしておく必要があると思います。

〝学習〟という言葉は、孔子の『学んで時にこれを習う』に由来するもので、二千年にわたる由緒の深い言葉です。〝学〟はわが国では〝まなぶ〟と読みますが、これは古くは〝まねぶ〟と言い、今の〝まね（真似）る〟ことを意味した言葉です。

立派な人の言行に触れて「ああすばらしいなあ」と思い、「自分もあのようになりたい」と願い、その言行を真似ることが〝まなぶ〟ということの本義です。それは、言わば人間の本能と言うべきものであって、だから、それが最も純粋に発揮されているのが幼児だと思います。

幼児は、大人の言うこと、なすことを実によくとらえ、実に見事に真似ます。そして、それを飽きずにくり返して、やめることをしません。これが「学んでこれを習う」の〝習う〟ことなのです。

〝ならう〟とは〝な（慣）る〟という古語の延びたもので、それは今の〝慣れる〟という言葉と同系の言葉です。『習うよりも慣れろ』という諺がありますが、実は、習うことは、元来〝慣れる〟ことを意味した言葉であって、だから〝習慣〟という熟語があるわけです。

同じ事をくり返しくり返しやっていますと、それに慣れて、むずかしいこともやさしく出来るようになり、努力しないでもうまく出来るようになります。それを〝習う〟というのですが、幼児の生活を見ていますと、実際、同じことをくり返しても決して飽きることのないことが判ります。

大人の目から見ると、実に単純なつまらないと思われるようなことを、いつまでもくり返しくり返し反復して、一向にやめる気配がないのをよく見ることがあると思います。そのように反復練習するので、それが身についてまるでそれが本性であるかのようになるのです。

「習い性となる」とか、「習慣は第二の天性である」とか言われているゆえんです。

幼児は、このように、真似ること（学ぶ）と、くり返すこと（習う）とが実に好きなように生まれついているのですから、幼児はだれでも生まれつき〝学習好き〟だということが出来ます。それで「好きこそ物の上手なれ」というわけで、自然と物事に上達し、能力が養われるのです。

## 3 立派な手本で教育を

### 〝勉強〟は強制しないこと

幼児の本性が、〝真似る〟ことと〝くり返す〟こと、つまり〝学習〟することが大好きなのですから、教育とは、親が自分の言行によく注意して、出来る限り立派な手本を示すことに尽きる、と言えましょう。

だから、私は、猫をかぶってでも、親は子供の目や耳の届く所では 理想の親であるようにふるまう責任がある、と言いたいのです。親が美しく優しい言葉を語り、立派な行動をすれば子供はそれをくり返し真似るので、自然と立派な子供になれるのです。

もしも子供が、汚い言葉を語り、醜い行為をするならば、それは親がそういう言動をして、子供がそれを真似た結果に違いありません。子供が悪いのではなくて、その罪は親にあると言えます。

このように、〝学習〟とは、幼児が生まれながらにして持つ本性であるのに対して、〝勉強〟とは、本性にそむいて、いやなことを我慢し、努力してやることを言います。子供の学習している姿と勉強している姿とは、外見では同じように見えても、中味は大変な違いがあるのです。

学習は人間の本性に従って行なうものですから、自然と楽しい気持になります。だから孔子は「学んで時にこれを習う。またよろこばしからずや」と言っているわけです。ところが、〝勉強〟は、人間の本性にそむいていやなことをするのですから、早くやめたいと思うだけで苦しみの連続です。〝勉〟とは、つとめる(力める)と読みますが、早く仕事を免れたいと思って、力めるというのが本義です〝強〟とは、〝しいる〟と読み、強制するのが本義の字です。だから、〝勉強〟とは強制された仕事から早く免れたいと思って努力するのが本義の言葉です。

商人が物を売る時に「勉強しておきます」と言いますが、それは「この値段ではとても売れないのですが、あなたのために我慢して努力して売るのです」という意味です。

さて、このように、〝学習〟と〝勉強〟とは、見かけは同じに見えても、中味は大変な違いがあるのです。これを決して混同してはなりません。

勉強は人間の本性にそむくものですが、それは強制することにあります。馬だって、川端まで連れて行くことは出来ますが、水を飲ませることは出来ません。一寸の虫にも五分の魂で、幼児といえども、強制していやなことをさせることは出来ません。

「栄養があるから食べなさい」と言って強制したら、幼児はますますその食べ物を嫌うようになります。それよりも、親がそれをおいしそうに食べたり、子供が空腹になり進んで食べるのを待つことです。空腹になれば何でもおいしく食べられますし、親がおいしそうに食べていれば、それを真似して食べたいと思うようになるものですから、絶対に「食べなさい」と言って強制すべきではありません。

## 4 成長を妨げる〝助長〟

### ひかえたい過保護、過干渉

これまでに、〝学習〟と〝勉強〟と、見かけは同じように見えても、大変な違いがあるというお話をしました。

〝学習〟とは、まず〝真似る〟ことであり、次にこれを飽きずに〝くり返す〟ことであって、それが幼児の本性であり、そうせずにはいられないものです。だから、親は子どもに良い手本を示してやるだけで、「やりなさい」と言わなくても、幼児は進んでこれを真似し、喜んでそれをくり返してやり、全く飽きることを知りません。それで、幼児は何事によらず、短期間にこれをすっかり身につけてしまうことが出来るわけです。

ところが、親は、それをずっと眺めていることが出来ないもので、何のかんのと口を出したくなるものですからつい注意し、〝楽しいはずの学習〟が逆に早く免れたいという〝いやな〟勉強〟に変わってしまい、そのため親の意図とは全く正反対の悪い結果に終わってしまうようです。

子供たちの感想を書いた作文を読んでみますと、「毎日楽しみにしているテレビを見終わって、さて勉強を始めようと思っている時、『早く勉強しなさい』と言われることくらいいやな気持になることはない。勉強しようという気持が、その一言で吹き飛んでしまう」という意味の作文によく出会います。このことは、どうもほとんどの子供が体験していることのようです。

「進んで負えば、重荷も重からず」という諺があります。自分から進んで持ってやろうという親切心で持ってやった荷物は、たとえどんなに重い荷物でも、それが少しも気になりません。ところが、人から持つようにと言われて持たされた荷物は、軽い荷物でも重く感じられます。これが人情というものです。

だから、〝学習〟を強制して、いやな〝勉強〟にしてしまってはいけないのです。

たびたびくり返して言いますが、〝学習〟は子供のもともと好きなことなのですから、ほっておいても必ず学習を始めるものです。それが待ち切れないで強制するのは〝せっかち〟というものであり、親の〝わがまま〟と言っても言い過ぎではないと思います。

中国の寓話に「苗の成長を少しでも助けてやろうと思い、畑の苗を一本一本、引っ張って回った」というお百姓の話があります。これが〝助長〟という熟語のいわれで、有名な話です。苗を引っ張ったら、成長を助けるどころか枯れてしまいます。こんなことのわからないお百姓がいるはずはありませんが、そこにこの寓話の意味があるわけです。

わが国では良い意味に使われる〝助長〟という言葉が、中国では、真の成長を妨げるものとして使われています。事実、子供の能力は、保護や干渉が過ぎれば過ぎるほど、その成長が妨げられます。孔子が、詩の大切なことだけを教えて詩そのものの講述をしなかったことには、親の陥りやすい〝助長〟から遠ざかる意図があったように思われ ます。

## 5 ほっておくことの効果

### 治癒を妨げる〝治療法〟

脳障害の治療で世界的に有名なアメリカのグレン・ドーマン博士の著書に、〝親こそ最良の医師〟という本があります。脳障害は従来、一生治癒することの出来ない難病だと思われて来ましたが、博士はその治療法を発見し、長期にわたる反復訓練さえ実施すれば治癒することを教えてくれました。

ただ、そのためには大変な根気がなければならず、その点で最もその治療に適した人は親であると考え、〝親こそ最良の医師〟という本を書いたのです。

親はもちろん脳障害の治療法を知っていません。しかし、もし正しい治療法を教えてやってこれをよく理解させ、体得させてやるならば、親ほどその施療を熱心に根気よく継続して実施できる者はいないはずである、そう考えた博士は、その治療を親に任せる方法を考え出したのです。

その思い付きの動機に、まことに興味深いものがあります。博士はほぼ四十年に及ぶ施療の経験を重ねて来ていますが、最初の十年間は失敗の連続、失望の連続であったと、その著書で自ら述べています。

博士は、当時最も有効だと一般に認められているあらゆる治療法を患者に実施したのですが、一向に

良くなっていきません。ところが、そういう治療法を受けたくても受けられない貧しい家庭の脳障害児に、意外にも良くなっている例が、少なからずあることに博士は気が付きました。

施療を受けない患者の方が、施療を受けている患者より良くなるとは一体どうしたことか。それは施療を受けない患者が、何か有効な別の治療法を実践しているとしか考えられないではないか。「何か必ずある」そう確信して博士はそれを追求し、ついにその正しい治療法を発見したのです。

その治療法とは〝這う〟ことだったのです。貧しい家庭の脳障害児は、家の中にほっておかれます。それで子供は何かを求めて家の中を這い回って一日を過ごします。その〝這う〟ことが、脳障害の治療になっていることを突きとめたのです。

脳障害のため足の萎えた幼児に出来ることは〝這う〟ことだけです。足の萎えた筋肉を強くするには、その筋肉を使うことが必要でそれ以外には何もありません。〝這う〟ことは脳障害児に最もやさしく出来て、最も有効な足の訓練であり、治療法だったのです。

前にお話した〝助長〟という言葉が、ここにもぴったりと当てはまるではありませんか。これまで脳障害児のために考えられ、施されて来た治療法は、いわば〝助長〟に過ぎなかったのです。それよりは、脳障害児自らの力によって、自分の足を自分の使いたいままに使わせていることの方が、ずっと有効な治療法になるのです。

このことを家庭教育にも推し及ぼして考えてみれば、きっと有効な教育法がつかめると思います。

## 6　大事な自然の成長力

### 〝速効〟求めず一貫性を

前項に、「医師の施す治療法が少しも効果をあらわさなくて、逆に、ほっておかれた障害児の方が症状が良くなった」という事実から、ドーマン博士が〝ほんとうの治療法〟を発見した、というお話を紹介しました。

その発見とは、「歩くことの出来ない障害児を歩けるようにするのに、歩く訓練をするよりも、這うことの方が有効だ」ということでした。歩く能力を養うのに全く無関係と思われる、〝這う〟ことが、歩く訓練よりも効果があるという事実、これは私たちに重要な問題を投げかけていると思います。

歩く能力をつけるには〝歩く訓練〟が最も有効な道理です。けれども、どんなに有効な方法でも短時

間の実践では効果があらわれない、ということをこの事実は私たちに教えてくれています。

反対に、歩く能力をつけるのに大して効果があるとも思えない〝這う〟ことが、毎日毎日長時間やっているために、長い間には驚くようなすばらしい結果をもたらす、ということを教えてくれます。

家庭教育においても、「親が教育熱心で、子供のためにいろいろな配慮をしているのにその子が悪い子になり、その反対に、教育に全く他関心な親の子が立派な子供に育った」という例が、この世の中には決して少なくありません。

このような事実にいくつか接すると、「親がわが子を教育しようなどと思わないのが良い。ほったらかしておいた方が良い」と思いたくなります。しかし、それは短絡的思考というものです。

親は、教育に大層熱心なように見える人でも、多くは思いつきの行き当たりばったりで一貫性がなく、従って、長期にわたる教育的配慮に欠けています。だから、熱心のようでも教育効果があらわれないわけです。

教育効果があらわれないだけならまだしものこと、反対に子どもを悪くしてしまうというのはどうしたことでしょうか。それは子供がだれでもうちに秘めている、自然なる成長力を無視して、〝苗を引っ張る〟ような行為をし、速効を求めるからです。

では、教育に無関心な親の子が立派になったということはどういうわけでしょうか。それは、無関心そのものが子供を立派にした原因ではなくて、無関心だったから〝苗を引っ張る〟ようなことをしなかったこと。それで、そのために子どもの自然なる成長力が十分に発揮され、また、環境がたまたま教育的に整えられていたので立派に育ったのだと思います。

ちょうど畑の作物が、肥えた土の中で、日光と雨とに恵まれさえすれば、手入れを全くしなくても、立派な作物になるのと同じことです。しかし、良い手入れをするなら、もっと立派な作物になるはずです。わが子にとって、無関心やほったらかしが一番良いことであるはずはありません。たとえ良かったとしても、それは親として恥しいことです。

## 7　〝手を貸さぬ〟親の親切

### 苦しみが子どもを鍛える

昔はかなり裕福な家でも、親は毎日生活に追われていて、子供のことを思いやりたくても、その余裕

がほとんどありませんでした。そのため、子供たちは自分の頭を使って考え、自分の体を使って物事を処理しないわけにはいきませんでした。

それで、頭を使うから頭の働きが活発になり、体を使うから身のこなしが上手になり、体も自然と丈夫になりました。ただ食物が粗末だったので、今の子供のようには見かけが良くありませんでしたが、暑さ寒さに強く、ねばりのある強靭さがありました。

今の子供は、暇の多い親たちから愛玩物のように扱われて、ちょっと面倒なことは親が見かねて直ぐに手を貸してやるものですから、子供は、自分の頭を使い手足を使って働くことが極度に少なくなりました。だから、いざという時には頭も手足も働かないひ弱な人間になってしまったのです。

しかし、今の子供たちにとって最も不幸なことは、頭や手足の働きの悪いことよりも、苦しいことに耐え忍ぶ精神の足りないことだと思います。

この世の中には、自分の思い通りになることの方が少ないので、いやなことでも回避せず、これに立ち向かって行かなければならないことが多くあります。そのため、苦しいことに耐え忍ぶ精神に欠けていたら、成功することは勿論、社会を生き抜いて行くことがむずかしくなります。




親というものは、わが子が苦しんだり困ったりしているのを見るのがつらいものです。だから、親がわが子の苦しみや悩みを引き受けてやりたく思うのは無理もないことだ、と思います。しかしながら、それは〝苗を引っ張る〟行為で決して子供のためになりません。

親が〝最悪の教師〟に陥りやすいのはこのためです。子供の能力は、子供自身がその苦しみ、悩みと戦い、これを克服して初めて養われるのですから、それを親が肩代りしてやっていたのでは、いつまでたっても子供の力がつきません。親はこのことに思いを致し、手を貸したい気持をおさえることが必要です。

「かわいい子には旅させよ」という諺は、親がわが子の苦しみ、悩む様を黙って見ていることが出来ないものだから、

それで作られた諺だと思います。子供が旅先で遇う苦しみや悩みは親には見えません。その見えない所が良いのです。

幼稚園教育の家庭教育にない良さの一つはそこにあります。親の目の届かない所で、自分の思い通りに行かない生活を余儀なくされるところが旅とよく似ていて、それが子供のために良いのです。

ところが、幼稚園生活のつらい所を、子供から根掘り葉掘り聞き出して、子供に手を貸そうとする親があります。これでは子供を幼稚園に通わす意味が半減してしまいます。〝艱難汝を玉にす〟と思い、子ども自身にそれを克服させることが肝要です。

## 8 親が作る子どもの欠点

まずわが身を正そう

「畑の苗は、肥えた土の中で日光と水とに恵まれさえすれば、ほっておいても立派に育つ。しかし良い手入れをするなら、なお一層立派になるだろう」と私は申しました。それを教育の上に当てはめて考えてみたいと思います。

肥えた土、日光、水……これらは、子供の環境が、教育的に十分に整備されていることに当たると思います。ただ、前者はその条件を努力だけで良くすることは、ほとんど不可能に近いものがありますが、後者は努力によってかなり良くなることが出来る、という違いがあります。

しかし、畑には、日当たりの良い肥えたものがあり、反対に山かげのやせた畑もあるように、親の教育的配慮とは無関係に、その子どもの環境が十分に整備されている場合もあれば、親の努力にもかかわらず子どもの環境が思うように良くならない場合もあります。

だから、親が教育に熱心なのにもかかわらずその子供がなかなか良くならないことがある反面、親が教育に無関心なのに子供が良くなることがあるわけです。しかしそれは、それぞれにそうなるべき理由があるからであり、ほっておいた方が良いということには勿論なりません。やせた土には肥料をやり、水に乏しければ汲んで来てやるように、子供の環境が悪ければ、これを少しでも良くしようとする努力が必要です。

しかし、最も必要なのは〝雑草を抜き取る〟という仕事だと思います。それは、わが子にとって為にならないものを遠ざける、ということに当たるでしょう。悪い遊びや悪い生活態度を禁じ、悪い漫画や

悪いおもちゃを遠ざける、ということは勿論必要ですが、それよりも私は、親の悪いマナーを子供に見せないように努力する配慮が、何より大切だと思うのです。

子供というものは、話し方、笑い方から、咳の仕方一つに至るまで、実によく親に似るものです。それは、遺伝ということもあるでしょうが、それ以上に、毎日毎日親の言動を見聞きしているから、それを自然と真似するのだ、と私は思います。

「子供は模倣の本能がある」と言われていて、事実、子供は身近な人の言動を常に手本に、それを真似せずにはいられないものが、あるように思われます。だから、親が、毎日〝せっかち〟の手本を見せていますと、子供も、必ず〝せっかち〟になります。

つまり、子供の欠点は親が作ってやったようなものです。ところがたいていの親はこのことに気がつきません。子供の欠点をとがめ、これを改めるよう子供に求めますが、親自身が欠点を改めない限り直りません。

だから、親は自分の言動について、常に反省をして、わが子に真似られたくないような自分の欠点は、これを子どもの前では絶対に見せないように努力する心構えが、ぜひとも必要だと私は思うものです。

## 9 〝麦踏み〟は時期が大切

### 幼児期に厳しい躾けを

畑の麦苗を強く育てるために欠かせない、大切な仕事の一つに〝麦踏〟があります。冬の寒い風が吹きぬけていく中で黙黙と、一株一株ていねいに麦を踏み続けるお百姓さんの姿は、まことに尊いものだと思います。麦は、強く踏みつけられれば踏みつけられるほど、根をしっかりと土の中に張り、大粒の麦を豊かにつけた穂を、立派に稔らせることが出来るようになるのです。

もしもこの麦踏みを怠りますと、寒さにあえば一ぺんにしおれてしまい、稔りの時には穂の重さを支えることが出来ずに倒れてしまいます。だから、麦踏みは、どうしても欠かせない大事な仕事なのです。

ここでは、この麦踏みに当たる教育について考えてみたいと思います。

麦踏みは、人間として生きていくために必要な基礎的良習慣をつける、厳しい躾教育に当たるかと思います。麦踏みが、苗の若い時期に行なうべきものであって、成長してからではかえって有害になるように、厳しい躾教育も、幼児期の間に行なって初めて有益なのであって、少・青年期ではかえって有害になる、ということを教えてくれます。

ところが、わが国の多くの家庭では、幼児期にはわがままいっぱいに放任しておき、大きくなるに従って厳しくする、ということが多いよう です。過日、親に叱責された二十歳の青年が親を殺す、という事件がありましたが、叱責の時期が遅すぎるとこんな事件をひき起こしても決して不思議ではありません。

叱責そのものは大切なもので、欠くことの出来ないものです。幼児の行為が、どんなに悪いことであるかを幼児に理解させるのにはぜひ必要なものです。幼児に説教しても、言葉の理解力に乏しい幼児には理解できません。それよりも、ひどく悪い行為に対してはひどく叱り、それほどでもない行為に対しては軽く叱る。その方が幼児には悪いことの程度がよく理解できるのです。

しかし、少・青年期へと成長していくのにつれて理解力が増しますので、叱責よりも説教の方が有効になっていきます。しかしその説教も、有効なのはせいぜい中学生までです。それ以後は、効果がないというよりも、有害です。

昔、古老のお百姓から「彼岸過ぎての肥料と二十歳過ぎての説教は為にならぬ」という言葉を聞いたことがあります。最初に施す元肥に対して、あとから施す肥料を追肥と言います。追肥は良い作物を収穫するためにぜひ必要なものですが、時期が遅いと逆に有害なことは説教と同じだ、ということです。何でも時期が肝腎ですね。

叱責されたのを恨みに思って親を殺す、というのは話にもならないあきれた行為です。しかし、そういうあきれた行為を生むほどに時期を失った叱責というものの恐ろしいことを、人の子の親たる者はよく心得ておく必要がある、と思います。

## 10. 試練に耐える強靭な意思

〝体罰〟は幼児期に

「幼児期に厳しい躾を」と申しましたが、それは、まだ判断力の出来上がっていない幼児ゆえに、身体で覚えさせるしか方法がないからでした。そうすることによって、身体が自然とそのように、つまり美しく動くようになる、ということで〝躾〟という字も作られたわけです。

幼児というものは、だれでも実に辛抱強い性質を持っているものです。例えば、這い這いを始めるようになりますと、どんな障害でもこれを乗り越えて進もうと、努力して止みません。また、立って歩く

ことを始めますと、どんなに転んで痛い目にあっても「もう歩くことは止めた」と言って諦める赤ちゃんは、一人だってあったためしがありません。

それはどんな子供でもそうなのですから、子供はみんな強靭な意志を持っていて、どんなに厳しい試練にも耐え抜けるように、初めから生まれついているのだと、つくづくそう感じさせられます。だから、幼児をしつけるにあたっては、幼児への思いやりから、厳しさに欠けるようでは、かえって子供のためにならないわけです。

こういう厳しい躾によって、立派な行動が自然と出来るようになりますと、周囲から褒められますし、それが自信につながり、自分の判断力で自主的に行動するように成長していきます。よくほったらかしにしておけば自主性が伸びる、と言う教育者がいます。とんでもないことです。

スピードのある車ほどブレーキが肝腎なように、能力の高い人間には自制心が特に肝腎です。折角立派な大学を出て、広い知識や高い能力を身につけながら、自制心が弱いために悪の誘惑に負けて、身を亡ぼす者が少なくありません。

その原因は、幼児期にわがままいっぱいに育てられ、思うがままに生きて来て、自分の欲望を抑えるということの重要さを、親から全く教えられなかった、ということに因るものが多いようです。

三つ子の魂百までも。幼児期にその人の性格が出来るのですから、親としてはこの時期に最善を尽すことが必要です。親が最良の教師となれるのは、この重要な時期を親が預かっているからです。

個性らしいものが現れて来るのは三歳ころからですが、厳しい躾は三歳ころまでに終るようにすることが望ましいことです。それは、そのころまでが最も受容性に優れていて自然に身につき、またどんな厳しさにも最もよく耐えられる時期だからです。

体罰などはこの時期に限ります。幼児に体罰などかわいそうだ、と思われるかも知れませんが、実は幼児ほど体罰に耐えられる時期は他にありません。体罰に対しては幼児が最も強いのです。その上、この時期の体罰は記憶に残らず、悪い思い出になる心配がありません。わが子に信頼されこそすれ、背かれることは決してありません。

## 11. わが子に最善つくせ

### 結果は天命を待つのみ

灰色雁の飼育で世界的に有名な動物学者、コンラード・ローレンツ博士の実験報告によりますと、「三つの水槽の生物に、同時に同じ肥料を入れて同じように育てても、その結果が三つとも全く異なった状態になることがある」と言っています。

例えば、三つの水槽に全く同じように二種類の藻を入れて、それを全く同一の条件で育てた場合でも、Aの水槽では片方の藻だけが勢いよく茂り、他方の藻はそれに圧倒されてしまっています。ところが、Bの水槽では勢力の状態がAの水槽と全く反対になっているのです。しかもCの水槽では、両者の勢いが全く均衡していて、適当に共存している、……というように三者が三様になることがある、というのです。

このような事実があるのです。だから、「同じように育てたのに、兄は良い子に育ち、弟は悪い子になった」という親の嘆きをよく耳にしますが、人間の成長には、藻の成長などよりもっとずっと複雑な条件があって、それが微妙な働きをしているのです。同じように育てたのに全く異なった人間になってしまっても、決して不思議ではないのです。




だから、人間の教育においては、「このような育て方をすれば、必ずこのような立派な子供になる」と言えるような教育法はこの世に存在しない、ということです。ただ「このような育て方をすれば良い子になる可能性が高い」ということだけのことに過ぎません。この事実は、教育には明らかに限界があることを私たちに教えてくれています。

前に述べた「何もせずにほっておいたのに良い子になった」という例も、そういう意味であり得ることですが、「だから、ほっておいた方がよい」ということにならないことは、言うまでもなくおわかりのことと思います。ほっておいても良くなることの可能性は極めて低いのですから、それを期待するのは愚かであり、怠惰です。かと言って、わが子の教育

に努力したのにその結果が良くなかった、と言って天を恨むのも間違っています。

〝人事を尽して天命をまつ〟

という諺がありますように、人は、人として出来る最善の努力を尽すべきであって、その結果の良し悪しは天命に任せるしかないのです。それなのに世の中には「ほっておいて良くなる」ことを期待し、力の出し惜しみをする人の何と多いことでしょう。

最小の努力で最大の結果を得ることが最良だと思っているのかも知れませんが、無駄を省けばそれだけ残る物資と違い、人間の精力は使えば使うほど湧き出てくるもので、使わないでいればその分残るどころか、逆に萎縮してしまうものです。

だから、力の出し惜しみくらい勿体ないことはありません。我こそは〝最良の教師〟であるという自信をもって、わが命よりも大事なわが子のため、最善の努力を尽されますよう期待して、筆をおきます。

（「母と子の新聞」昭和五十六年四月～五十七年八月）